

II 金魚の運命を一変させたものはどんなことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ゲーム機からすくい取ってきた金魚が弱ってきているので、友人が家で飼おうと決心したこと。
- イ 友人がビニール袋に入った金魚を持って、待っている筆者の前に現れて事情を説明したこと。
- ウ 実家で金魚を飼っている女の子がたまたま居酒屋で働いていて、金魚を引き取ってくれたこと。
- エ 筆者と友人が待ち合わせをした居酒屋の板前さんやアルバイトの女の子が金魚に関心を示したこと。

III 運命が一変した金魚のことを、筆者はどう言っていますか。文章中から九字でぬき出して答えなさい。

4

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

5 家から病院までわずか二キロの通勤に自転車を用的ているのだが、冬になると※浅間おろしの寒風に耐えられなくなる。防寒着を着こみ、毛糸の帽子をかぶってみても、わずかに露出した頬や唇から寒気が容易に体の芯まで侵入してしまう。いたずらに厚みを増した皮下脂肪は防壁の役目を果たさず、かえって冷えを保存したりもする。

10 ①私はもはや自然のなかに※敢然と独立する若者ではなく、自然の一部として、冬になればしおれたり枯れたりする草木に近い存在になっているらしい。寒さに耐えながら無理に自転車をこいでいると、※心筋梗塞を起こしそうな予兆すらある。危ないぞ、おまえ」と臆病な脳が警告する。

15 そんなわけで、このころは冬になると妻に車で送り迎えしてもらっている。私は実に情けない理由で十七年前に運転免許取り消し処分を受けているから車に乗れない。妻は専業主婦だから時間に余裕はある。でも、朝の送りはいいけれど、夕方の迎えは何時になるか分からないので困る、と言う。どこかに出かけていることもあるし……。

20 帰るくらい歩けばいいのだが、一日中患者さんと話していると頭がふらふらするようになって、途中で倒れそうな※予期不安にかられる。なんのことはない、体が薬を覚えてしまったのである。

25 それでも、いつ夫からの呼び出しがあるかと気にかけるが一日を過ごす妻のストレスも分からなくはないので、②妥協案として折りたたみ自転車をかうことにした。朝はこれを車のトランクに入れて病院に行き、夕にはこれに乗って軽い下り道を帰ればいい。

問九 筆者はこの文章で何を言おうとしていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 人生の中でのいろいろな出来事は、常に幸運と不運の繰り返しでめぐってくるものである。
- イ 不運な人生を幸運な人生に変えるには、不運な環境の中でも幸運を見つけようとするのである。
- ウ 人生で強い運を手に入れるかどうかは、周囲の人々とうつながらるかによっているのである。
- エ 人の一生に決定的な影響をあたえる運というものは、偶然の力が働くものである。

35 すぐに自転車店からパンフレットをもらってきて、一番安い折りたたみ自転車をメーカーに注文した。それでも私がいま乗っている自転車の倍くらいの値がついていた。

40 翌日の夕、車で迎えに来た妻の機嫌が悪い。理由を問うと、「朝、おまえの送り迎えはおれの仕事の道具に過ぎないって言ったじゃない」と、③ハンドルを手にしたまま泣く。

45 「あのねえ、おれは患者さんを相手にする医者だぞ。それに、言葉の大事さを知っているつもり作家だぞ。そのおれが、いくら古女房にだって、仕事の道具、なんて言い方をするわけがないだろう」

50 齢を重ねて己の弱さを自覚するようになってから、他人を傷つける類の言葉を口にしないよう過度に敏感になってきたことはたしかだ。

55 ④これだけは若いときにはなかったものだ。寒さへの※耐性を失うとともに、言葉への過敏性を獲得してしまったのか。冷静に計算してみれば、どの世代でも得たものと失ったものの損得勘定はゼロなのかも知れない。

60 言った、言わない、言った、言わない。まるで訴訟の被告になったかのように責められ続け、家に帰り、炬燵にもぐりこむと自転車店から電話がきた。メーカーに発注したら希望の車体の色が無いが、他の色ならあるとのこと。仕事場への通勤だけが目的だから、それでいいですよ、と答えて受話器を置いてから、気づいた。

65 今朝、私は車の助手席で、「折りたたみ自転車の値段は高すぎるけど、まあ、仕事の道具だからしかたないよな」と、歩道を走る自転車通学の高校生たちを眺めながら、独り言みたいな、妻に問いかけるような、あまい言葉が発したのだった。

これを、送り迎えのストレスがピークに達してきて、小児期に患った※中耳炎のせいでいくらか耳の聴こえの悪い妻は、

「おまえは仕事の道具に過ぎないんだから」と、⑤見事なまでに誤解したのだった。

⑥どんなでもない早とちりだ、と怒鳴りながら、ほんのどこか私を責めてはいなかった。それよりも、もう二十年以上おなじ屋根の下で暮らしている彼女との間でも、私の口にする言葉というものがこれほどまでに誤解されやすいはかなさを秘めた「壊れ物」であることに※慄然とした。

だとしたら、日々の診療で患者さんに話していることのうち、どのくらいがこちらの意図したとおりに伝わっているのだろうか。そもそも私が口にする「痛い？」は、患者さんが感じている「痛い！」との程度共鳴し合っているのか。もしかしたら、外来の診療室には「仕事の道具」という言葉に聞かされた誤解のごとき深い溝が常に横たわっているのではないか。

誠実な診療とは、埋められない溝を埋めようと言葉を多用する鈍感な強引さではない。この原則だけは※明晰に分かっているのだが、ではどうすればいいのか。

問一◆

——線 a 「危ないぞ、おまえ、と臆病な脳が警告する」、b 「まるで訴訟の被告になったかのよう」に責められ続けて家に帰り」に使われている表現技法として適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 直喩
- イ 倒置法
- ウ 体言止め
- エ 擬人法
- オ 対句

問二◆

——線①「私はもはや自然のなかに敢然と独立する若者ではなく、自然の一部として、冬になればおれたり枯れたりする草木に近い存在になっているらしい」とありますが、

I 「私はもはや自然のなかに敢然と独立する若者ではなく」とは、どういうことですか。次の文の空欄にあてはまる言葉として最も適切なものを後から選び、記号で答えなさい。

・今の筆者は、 若かったころの自分ではないということ。

ア 親から離れて独り立ちを願って前向きに進んでいた

イ 将来を考えず自然のなかで好き放題に生きていた

ウ どんな気候の中でも積極的に勇敢に立ち向かっていた

エ 目の前の厳しい自然のおそろしさに立ち止まっていた

疑問は年ごとに深まる。結局なにも分からぬまま死んでゆきそうな※凍とした想いだけが、かろうじてこの疑問を支え続けている。

【南木佳士「寒い朝の誤解」(『急な青空』へ文藝春秋刊)所収)より】

※浅間おろし：浅間山(長野県と群馬県の境にある山)から吹きつける冷たい風。

※敢然：思い切って行う様子。

※心筋梗塞：心筋(心臓を構成する筋肉)が酸素不足に陥る病状。

※予期不安：突然に理由もなく起こった発作を経験して、そのおそろしかった発作がまた起きるのでないかという不安感が生じること。

※耐性：環境の変化に適応していく能力。

※中耳炎：耳の鼓膜より内側の中耳という空間で起こる感染性疾患。

※慄然：おそろしさにぞっとする様子。

※明晰：はっきりしている様子。

※凍：とりとめがなくはつきりしない様子。

II

「自然の一部として、冬になればおれたり枯れたりする草木に近い存在」とは、どんな存在ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 消極的ではつらつとした態度を保てない存在。

イ さびしさのために気持ち落ちこんでいる存在。

ウ 外に出ようとせず家の中に閉じこもっている存在。

問三◆

——線②「妥協案として折りたたみ自転車を買うことにした」とありますが、だれのどんな気持ちから折りたたみ自転車をかうことになったかを、次のようにまとめました。これについて後の問いに答えなさい。

- ・一日の仕事の疲れで八字
- 1 一字
- 2 三十五字以内
- 3 三十五字以内

I 1・2にあてはまる言葉を、文章中からそれぞれ指定の字数でぬき出して答えなさい。

II 3にあてはまる言葉を、文章中の言葉を使って三十五字以内で答えなさい。

問四◆ — 線③ 「ハンドルを手にしたまま泣く」とありますが、妻はなぜ泣いたのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 毎日夫を迎えに行く苦勞を減らそうとして、自転車を買おうとしている夫の優しさにうれしくなったから。

イ 夫が折りたたみ自転車の値段の高さにケチをつけ、ただで送り迎えする自分の働きに頼ろうとしているから。

ウ 夫が自転車で帰宅するようになれば、車の中からなかなか夫婦の会話がなくなってしまうと思っただから。

エ 苦痛を感じながらも夫につくしてきたのに、道具と知られていたことを知り、悔しくてさびしかったから。

問五◆ — 線④ 「これだけは若いときにはなかったものだ」とありますが、この文にこめられている筆者の思いをまとめた次の文の空欄にあてはまる言葉を、文章中から指定の字数でぬき出して答えなさい。

・ 齢を重ねて「七字」を獲得しているのだから、妻のことを「仕事の道具」なんていう言い方をするわけがないという思い。

問六◆ — 線⑤ 「見事なまでに誤解したのだった」とありますが、筆者が誤解だと気づいたのはどんなときでしたか。このことがわかる一文を文章中から探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

問七◆ — 線⑥ 「とんでもない早とちりだ」と怒鳴りながら、ほんのどのところ私は妻を責めてはいなかった」とありますが、

Ⅰ 「とんでもない早とちりだ」と筆者が怒鳴った理由をまとめた次の文の空欄にあてはまる言葉を指定の字数で文章中からぬき出して答えなさい。

・ 「仕事の道具」という言葉を、筆者は「八字」に対して使ったのに、自分のことを言っているのだと誤解した妻に「2 七字」いたから。

Ⅱ このときの筆者は妻を責める気持ちではなく、「ほんのどのところ」はどんな気持ちだったのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 妻との会話の中であつても、妻を不快にさせるような言葉を使ったことを悔やんでいる気持ち。

イ 自分の何気なく言った言葉で妻を傷つけていたことに、自分の無神経さにあきれいている気持ち。

ウ 作家として言葉に対して持っていた自信が妻の誤解でくずれさり、落ちこんでいる気持ち。

エ 自分の話している言葉が誤解されやすい言葉であつたことを知り、ぞっとしている気持ち。

問八◆ この文章を、体験を書いたまとまり、感想を書いたまとまり、の二つのまとまりに分けるとすると、感想を書いたまとまりは何行めから始まりですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 66行めから

イ 71行めから

ウ 77行めから

エ 89行めから

問九◆ 筆者はこの文章で何を言おうとしているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 患者の痛みを正確に聞き取りその痛みを自分も体験するという診療をすることで、患者との間の言葉の誤解が解けていくということ。

イ 日々の診療で自分の言葉と患者の言葉の間に深い溝があるかもしれないのに、その溝を解消する方法が見いだせないでいるということ。

ウ 自分の話していることが患者に正確に伝わらないことが多いので、患者に自分の思っている疑問をぶつけることが大切であるということ。

エ 自分と患者の間には理解し合えない溝があるが、その溝があることを意識して患者と接していることで自分の心が救われるということ。

問一 ②

a  
68

b  
69

問二 ②

I  
70

II  
71

問三 ②

I

72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81

⑥

II

82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

101 102

問四 ③

103

問五 ②

104  
105  
106  
107  
108  
109  
110

問六 ③

111  
112  
113  
114  
115  
116

問七 ③

I

117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166

問八 ③

167

II

168

問九 ③

169

合計  
/ 34